はじめに

差別をテーマに話をしようと思い立ったのは、２０１７年秋のことでした。中央大学法学部非常勤講師の杉原志保さんと教授（いずれも当時）、広岡守穂（もりほ）さんから「大学で授業をしませんか」と誘われたのです。「職業・差別・人権」という総合講座で、４、５人の講師が交代で毎期３回ずつ授業をしていくもので、その一人にということでした。

最初にタイトルを聞いたときは、「倫理」や「道徳」の授業のようで、私には縁遠い世界と感じました。大学の先生をしていた元新聞記者に話してみると、「藤原君が倫理？　それ、かなり笑えるねえ」とからかわれたくらいです。しかも、そのころは新聞に長文記事を書く仕事で日々忙しく、「準備する時間がないので」と断ると、「準備なしでも書かれた本の１章分くらいをお話ししてくれれば」と言われ、不安ながらも引き受けました。

驚いたのは、２００人近くいる学生や講師陣の真剣さ、熱さでした。授業後のリポートでも、私の知らないアメリカの10代の歌手の差別意識や高校留学のときの被差別体験、鋭い問いを私

にぶつけてきました。

授業を経てわかったのは、差別についての本や研究を紹介し、あれこれ理屈をこねるよりも、私が見た、体験した差別、そのときに感じたことをそのまま語るほうが学生の耳に残りやすいという事実でした。私に起きた出来事から、人のふるまいや感情、例えば、恥ずかしさについて、詩人や哲学者の話をもとに考えました。

私自身、学生時代の授業内容で記憶に残っているものはほとんどありません。それでも、講師がぽつりと漏らした私的な話やその人自身が体験した話だけは、なぜかいつまでも覚えています。このため、授業では一つの言葉でも、一文でも、聞いている人たちの記憶に残る話をしたいと思い、きちんと準備をするようになりました。

今回、4年間の授業、21回分を文字にし1冊の本にするにあたり、大幅な並べ替えをしました。身近な東京での地域差別や、日本人に対する差別、アジア人全般、そしてアメリカの黒人、アフリカ人と、差別される側に焦点を当てるようにしたからです。

また、一つの仮説として、「死にかける経験」と「差別しない心」の間にあるつながりについて考えました。さらに差別に対する敏感さや意識はどこから生まれるのか、生来のものなのかについても掘り下げました。

この本はすべての差別を網羅しているわけではありません。人種、性、地域、宗教、職業……あらゆる差別がありますが、あくまでも一人の人間である私自身が重く感じた経験を中心に据えたためです。

外見、身だしなみ、服装で人を判断する人は少なくありません。人は惑わされやすいので、どうしても少ない情報だけで相手を決めつけたり、独り合点になりがちです。でも、他人を見た目で断じる人が少しずつでも減っていけば、いまよりも楽に生きられる人は増えていくのではないでしょうか。

肌の色、骨格、背の高さ、顔のつくり、国籍、言語、習慣、食べもの……。そんなことだけを理由に差別される。年に一度程度の体験なら、「レイシストはどこにでもいる」と笑い飛ばせても、それが日常のように続くとしたら、つらいものがあります。

どうしたら差別はなくなるのか。それが無理でも、どうすれば自分の中にある差別する心を乗り越えられるのか。授業ではそんな問いを考えながら話をしてきました。

差別の定義はいくつもあります。第8章でも触れますが、私がなるほどと思ったのは、富山大学人文学部（人間科学）の佐藤裕（ゆたか）教授の定義です。以下、佐藤教授の著書『新版 差別論――偏見理論批判』をもとに、私なりに解釈しますとこういうことです。

３人集まると差別が始まる。つまり、３人のうちの二人が「あいつはどうもなあ」「これを分けるのはやめよう」などと口裏を合わせる。そのたくらみ、行為が差別だという考え方です。ですから、「日本人は○○だ」といった決めつけ、偏った見方が差別を生み出す例もありますが、ある場面でたまたま複数の人が、そこにいた一人を排除しようとする。それが差別の始まりです。

外国人が歩いているのを、珍しげに見るのは差別ではありません。しかし、そこにいた仲間に「変なやつが来たぞ」と声をかけ、二人で口笛でも吹いてからかったら、それは差別になります。そんな例はいくらでもあります。学校でのいじめ、一人を無視する「シカト」も差別です。それを前提にしますと、日本はかなり差別がはびこる社会に思えます。

私は新聞記者として南アフリカ、メキシコ、イタリアに計15年ほど滞在しました。南アへの赴任はアパルトヘイト（人種隔離）政策が終わった直後でしたし、５年いたメキシコなどラテンアメリカには５００年におよぶ先住民差別があります。それでも、どうしてだか、差別を中心に据えた本を書いたことはありませんでした。

それはおそらく、差別が人間の持つ一つの特質、現象の中でももっとも忌まわしいものだと思うからです。差別が暴力、戦争をもたらすこともあります。そんなものに関わってはいられ

ない。もっと明るい面を、前向きな面を見ていこうという考えから、真正面から取り組んでこなかったのです。例えば一人の人物を書く場合も、その人の背景、環境として差別を描くことはあっても、差別そのものをテーマになどしたくなかったのです。それほど忌み嫌っていたのでしょう。

でも、4年間の授業で、私の中から嫌な記憶がよみがえり、そのときの自分の気持ちがずっと心の底に貼りついたままだったことに気づきました。そんな出来事の中にある、人と人との関係、心のありようを探るのが、差別を考える上で、とても大事な手法であることもわかってきました。

ベラルーシ出身でウクライナ育ちの映画監督、セルゲイ・ロズニツァさんが私とのインタビューで、差別意識の変化についてこんなことを言っていました。

「そうした人の変化を考えるとき、私はいつもカニバリズム（人肉食）を連想します。人肉食は2、3万年前には普通のことでしたが、次第に排除され、おそらくここ5000年ほどでほぼなくなりました。少なくとも100年ほど前に人類の大多数が『人肉食はいけない』とみなしたのです。人の差別意識が直ちに改まってほしいと思っていますが、長い時間がかかると思います」

どれだけの時間がかかるにしても、一人でも多くの人に差別しない心を身につけてほしい。5年後はいまよりもましに、10年後はさらに良くなるように。大事なのは一人ひとりがどう学び、どう変わっていくかに尽きると思います。

差別は人間集団を知る上で多くのヒントを与えてくれる一つの徴候です。自分の差別意識を考え、過去に自分が差別とどう関わってきたかを振り返り、その意味を探る。この本がそんなきっかけになってくれたらと願っています。